

資料1

## 認識から行動へ——「識字の十年(Literacy Decade)」への諸原則に関する宣言

一九九一年二月四日～八日、ドイツ・ボンITFL第七回会合

### 国際識字推進協議会(ITFL)

国際識字推進協議会(ITFL)は、一九九〇年の国際識字年に対するその貢献を評価するため、一九九一年二月四日～八日にドイツのボンで会合し、閉会にあたって次の声明を採択した。

1 国際識字年は終わった。しかし、国連が識字年を宣言することを必要とした地球規模の非識字問題は、これから一〇年、二〇年にわたって、解決のための忍耐強い、創造的なたりくみを必要としている。識字年の成果は、全般にめざましいものであった。非識字の広範な問題性とそれが何を意味するのかという点について世界に警告を発し、識字運動を支援する環境がづくりだされた。識字年が生み出した機会を生かし、認識を高める段階から行動の組織へと発展させなければならない。世界の一〇億人近い成人にとっては、いまだに世界人権宣言が約束した教育への権

利は単なることばだけの約束にとどまっており、現実のものになっていない。

2 世界中で読み書きのできない人々のうち、ほぼ二分の二は女性である。この格差および格差の原因となっている性差別が存在する限り、意味のある教育の進展は望めない。女性も子どもを生み、子どもにとって最初の教師となるだけでなく、さらに文化を担い、世界の多くの地域で食糧生産の主要な担い手となっている。この格差の根は深く、対策はすぐ簡単にとれるというものではない。家庭、畑、市場で一日に二二時間以上も働く女性にとって、その負担を軽減するような措置がとられなければ、識字を学ぶ時間や、エネルギーも残らない。識字は、とくに女性に対する

貧困、抑圧、不正義の原因であるとともに、それらの結果でもある。より公正で、正当な社会をつくる努力を同時におこなうことなしには、識字を世界に実現することも成功しないであろう。これは、断固たる決意で緊急に行動することが必要だということも強力な理由である。

3 国際識字年を計画するにあたり、我々は「識字の推進は平和と進歩の追求と不可分である。摩擦やあつれきが、……関心を妨げ、資源配分を建設的目的から破壊的目的へと向かわせる」とを認識した。我々は、政治家および一般の人々に識字の前進と平和の進展の關係について検討し、より平和な世界を建設する方法と手段を追求するよう要請した。東西の対立とお金のかかる「冷戦」が終結したことにより、われわれの希望は高まった。残念なことに、この希望の瞬間がいかに薄っぺらく、脆弱であったことか。教育者として、また人間として、あらたな戦争の勃発を目のあたりにして、驚きと恥ずかしさを感じる。この戦争は、軍人と市民のかけがえない命を奪うのみならず、一日あたり推測で一〇億米ドルの支出をもたらしている。しかも、六歳から一二歳の一億人以上の子どもが行くべき学校もなく、一〇億人近い男性、女性が読み書きできない状況において、このことがおこっている。戦争と破壊についてはこれだけの浪費をするのに、世界の指導者は教育を通じて平和の基礎を築くために必要な資金になる、なぜこれほどまでに出し渋るのであろうか。

8 国際識字年には、メディアの関心が教育と識字の問題に向けられた。国際識字推進協議会はメディアの支援に感謝するものであり、それなしには一般の意識を高め、情報を提供する努力も成功し得なかったと考える。しかし、メディアのとらえ方の中でも特に注目すべき例をひとつ紹介して、敬意を表したい。それは、日本の代表的新聞の読売新聞である。読売新聞は、一年半以上わたって、世界中の識字に関するできごと取材するためにスタッフをおくり、定期的に識字活動についての記事を掲載した。タブロイド版で一〇〇ページ以上におよぶ。読売新聞のおかげで、日本の一般の人々は、事例は少ないが問題が存在する日本と、世界の非識字者のはば四分の三が住む他のアジアの国々に関して、非識字への理解を深めた。さらに、読売新聞のキャンペーンを通じて、アジア各国の識字活動を支援するための募金が二五〇万米ドル集まった。読売新聞のはたした役割はメディアの社会的、教育的使命をはっきりと示している。このようなとりくみが今後の一〇年間、あらたな着想の源となることを強く期待する。多くの国の新聞にとって、識字の推進は単に公共のサービスにとどまらず、まさに自らの将来に対する投資である。

国際識字年において、メディアの視点の多くは、開発に与える非識字の悪影響をさぐるものであった。これらの事実は一般にもっと認識されるべきであるが、識字の前進、プログラムやアプローチの成功例、また非識字を克服した個人や地域に今後さらに関心が向けられることを期待する。この一〇年の進展とともに、問

4 国際識字年の多くの前向きな成果のひとつは、学習者が成人識字運動の指導者として登場したことである。社会が期待するレベルで読み書きできないことが痛みをとまなう経験であること、識字学習者以上にわかっている人がいるであろうか。また、識字を必要とするにもかかわらず、積極的に登録することを恐れたり、ためらう人々にどのように意志を伝え、動機づけを与えるかについて、学習者以上に知っている人はいない。学習者は、教育サービスの提供者とそのサービスを必要とする人々の橋わたしができる。かつて識字学習者であった人々を有給あるいはボランティアの識字指導者として活用するためにあらゆる努力をおこなうべきである。彼らは、識字が達成できる事実を示す生きた事例であり、したがって学習者を励ますロール(役割)モデルとなる。

5 識字は他の問題と別に存在するのではない。読み書きできない人々は単に世界の人々の一部というのではなく、抑圧され、搾取され、社会的に不利な立場におかれた人々でもある。非識字はとくに障害を持つ人々の間におおく見られ、二重に不利な立場を強いている。我々国際識字推進協議会のメンバーは、障害を持つ人々の教育に対するニーズに関心がはらわれること、そして必要な場合は障害を持つ人々すべてがあらゆる段階の教育へのアクセスを確保できる特別な措置の提供を強く要請する。障害の上、さらに社会的無視が加えられるということがあってはならない。世界のあらゆる市民に教育への権利が保障されている。

7 国際識字年の主なメッセージのひとつは、識字がすべてにわたっての責任であるということだ。識字社会は、政府と非政府機関、ならびに学校における公教育と教会、家庭、その他学習者が集うあらゆる場所での非公式の教育の結果として生まれる。識字のとらえ方に必要なのは、学ぶ態勢にある人と教える準備ができている人、そしてさまざまな形で協力する意志をもった人である。多くの機関がかかわる。学校や識字プログラムだけでなく、図書館、書店、出版社、雇用者、その他多くの機関である。識字社会は、教育に断固と取り組む社会である。指導者が識字をすすめる政治的意志を表明し、人々が広く識字への意志をもっている社会である。識字にとりくむ社会は、教育を支援するために、従来の資源とともに必要であれば新しい資源も活用する。比較的貧しい社会は、豊かな社会より明らかに教育に向ける資源は少ないものの、同じ所得レベルで比較したときに豊かな国と比べて、国家資源のはるかに多くの部分を教育に向けている社会もある。従って、教育は資源だけの問題ではなく、主要には断固とした決意と意志の問題である。

8 参加組織の代表が強調したのは、非識字が世界的現象である一方、南の発展途上国がもっとも深刻な影響を受けているという点だ。これらの国々が直面する問題は、絶対的にも相対的にも

大きな問題であると共に、累積債務に特徴づけられる永続的な経済危機によって資源が限られている。そして、この債務もいっそう不利になり、悪化を続ける交易条件の結果である。識字世界をつくるための闘いは、経済危機によってはるかに複雑な様相を呈している。経済危機は、教育に向けられる資源を制限し、学習者の運命をその当人から奪い、不正で予測不可能な経済秩序にゆだねてしまったために、学習者のやる気をくじいてしまう。成人の識字は、あらゆる教育機会へのアクセスを提供し、学習者が生活条件改善の可能性に希望がもてるようにするものでなければならぬ。識字によって、生活のあらゆる側面—社会的、政治的、経済的、文化的—に全面的、かつ民主的に参加できるようにすれば、動機づけも強まり、学習達成度もあがる。識字プログラムの成功と魅力は、教室外の条件に強く影響される。

9 これから一〇年のすべての活動の全体的目標は、非識字を劇的に減少させることである。識字の一〇年にむけた活動を計画するに当たり、国際識字推進協議会のメンバーは認識を高めることから行動へと移行する時がきたと考えている。将来の提案をつくり、判断するため、まず問われるべき問題は、学習者と指導者(学習促進者)がかかわるところ、つまり草の根で識字の活動をどのように支援できるのかということである。行動は、地域のレベルだけでおこなう必要はないが、いかなる場合も提案された活動が現場で識字を前進させるものでなければならぬ。

—新たに識字者になった人々向けのよみもの教材(実生活に関する機能的な問題だけでなく、生活のあらゆる側面をあつかったもの)

—新しい読者向けの新聞作成

—村の話の収集と出版

教材は外から持ち込むのではなく、国内で学習者の参加によって作成するべきである。

\* 訓練教材の作成および(または)状況にあわせた適用

\* 印刷設備や紙の供給

\* 資金集め、地元資源の活用、および自助努力

\* 長所と弱点を分析するための質的分析方法や問題を照らし出す手法を用いた評価、とくに形成的評価とプログラムの実施面の改善。簡単に適切な方法に焦点をあてた評価用ハンドブックの作成、および進行中のプログラムをモニターするための使いやすい管理情報システムの開発

\* 適切な賞をもうけ、すぐれた取りくみを表彰すること。これらとりくみをすすめるにあたり、NGOは可能であればいつでもメディア、出版社、図書館、各種サービス、ビジネス、産業界その他のパートナーと新しい創造的な連帯関係をつくるべきである。

12 国際識字推進協議会につづくものとして、国際成人教育協議会の既存の地域ネットワークをもとに国際識字支援サービスをもうけるという提案が検討された。この提案の中心には貴重で実

10 国際識字推進協議会の加盟団体は、識字年のとりくみをふりかえり、今後一〇年の計画を検討した。この会合で話し合われたほとんどすべてのとりくみは、現場の識字プログラムを強化する目的をもっていた。また、この点が将来のとりくみの最優先課題でなければならぬことが参加者の総意であった。ひとつ、またはそれ以上の組織によってふられた点としては、つぎのようなものがあつた。政治的意志の強化、社会変革の推進、識字の重要性をひきつづき訴えること、識字指導者とプログラムスタッフの訓練改善、より効果的な学習教材の作成、女性の地位向上、学習者をさらに中心にすえ、より効果的な参加を確保すること、地元の資源の動員、ネットワーク、とくに全国的、全地域的なネットワークの構築と強化、地元および全地域的な組織の自律と独立性の強化、地元の取りくみ強化および横のつながりや協力関係の発展、である。これらすべての多様なとりくみがめざす共通の目標は、効果的で適切なプログラムを通じてより多くの学習者に識字を提供することである。

11 NGOのとりくみとして、以下の点が緊急で重要な分野とされた。

\* 識字の重要性を訴え、意識啓発をはかること

\* ニュースレター、実践者向けの定期出版物、重要な文献のアップデートや要約および文献リストを通じて、コミュニケーションを強化すること

\* 教材の作成

行可能なアイデアが含まれている、という受けとめかたがされた。さらに、この提案はお金をかけて新しいものをつくるというのではなく、既存の構造をベースにするという点で、経済性と効率を考慮したすばらしいものであった。

また、ユネスコ、ユニセフ、国連開発計画(UNEP)、世界銀行などの国際機関と協力関係にある非政府機関(NGO)が参加する「万人のための教育ネットワーク」の設立というもうひとつの補完的提案もこの会合で行われた。国際識字推進協議会のメンバーは、二つの提案がともにすばらしい内容をもっていると考えており、これらはさらに検討を加えて発展させるべきである。これらの構想に参加するかどうか、またどのように参加するかという決定は、それぞれの組織がその基準と手続きにもとづいて決定すべきものである。

13 参加者は、会合があたたかい雰囲気の中で行われたこと、また完ぺきな組織と質の高い準備がおこなわれたことに対し、ドイツ国際開発機関に感謝するものである。とくに、ジョセフ・ミューラー博士、アンジャ・デートリックさん、および事務局のアンジャ・ウェーバーさん、ジョン・クリッセルさんに感謝する。

三年以上に及ぶ期間の中で、今回は七回目の会合であったが、この会合の終わりと共に、国際識字推進協議会の任務、つまりNGOの積極的参加を得ながら国際識字年に向けた包括的プログラ

ムを計画し、実行し、評価するという作業もほぼ終わらうとしてゐる。国際識字推進協議会の数多くの活動が与えた大きな影響は広く認識されている。メディア専門家会議(Media Colloquium)、本の航海(Book Voyage)、情報をもひこんだ定期的なニューズレターの発行、またその他の多くのとりくみが巧みに行われ、成功した。国際識字推進協議会の加盟組織は、この場を通じて、同協議会調整事務局のプログラムコーディネーターであるパトリシア・ロドニーさん、アドミニストレーターの袖谷素代博士に感謝するものである。また、国際成人教育協議会のスタッフ、とくに事務局長のバド・ホール博士、プログラムディレクターのユスフ・カッサムさん、国際識字年ニューズレター編集長のダールン・オーエンズさん、プログラムアシスタントのライムンダ・デニアートさんに感謝する。また、国際識字推進協議会の南アジア事務所のすばらしい仕事に対して、ラリタ・ラムダス所長、プログラムコーディネーターのインディラ・コイツアラさんに感謝する。また、加盟組織はオディル・モロー議長の有能な指導のもとにあるユネスコNIGO常設委員会の貴重な協力を感謝する。さらに、国際識字推進協議会がその仕事をおこなう上で密接な関係にあったユネスコ国際事務局のコーディネーターであるジョン・ライアン博士、レスリー・リマー・ジュ博士その他の人々に感謝する。

最後に述べたいのは、すべての参加者にとって、過去のとりくみは前に広がっている大きな仕事のほんの序章にすぎないという

ことだ。一〇年あるいはそれ以上の挑戦と努力が待っている。本  
当の識字世界が到来するまでは、国際識字推進協議会や識字年の  
とりくみが成功したと判断することはできない。それではうそに  
なってしまう。これまでに達成されたことは、これから試みねば  
ならない、より巨大な任務への挑戦さうながしているのだ。

この声明は、一九九一年二月八日にドイツのボンで開かれた国  
際識字推進協議会(ETFL)の第七回会合の最後に満場一致で  
採択された。(最終版一九九一年二月一四日)

(訳・平沢安政)